

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 30 年 6 月 21 日現在

機関番号：42305

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2017

課題番号：26350059

研究課題名(和文)父親の育児参加を促進する参加型教育プログラムの開発と効果検証のための一研究

研究課題名(英文) A study on developing an educational program and its evaluation of the effect to encourage fathers' participation in childcare

研究代表者

天宮 陽子 (AMAMIYA, Yoko)

明和学園短期大学・生活学科・准教授

研究者番号：10645964

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,700,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、ホールシステムアプローチを基にした集団的対話と、心理教育リーダーシッププログラムを基にした活動を軸に、育児参加へのモチベーションを高め、父親および将来父親になることが期待される若年男性の“育児力”の向上を目指した子育て支援プログラムの開発を行なった。また保護者向けの集会や催事、ボランティア活動、子ども会育成会主催の親子活動など、さまざまな機会においてプログラムを実践し、その効果を検討した。さらに対話アプローチの効果検証のための指標の開発も行なった。

研究成果の概要(英文)：In this study, we developed a child-rearing support program aimed at increasing fathers' and future fathers' childcare skills and motivating them to participate in childcare through group dialogues, focusing on activities rooted in psycho-educational leadership training programs. We also investigated the results of a variety of programs aimed at parents, such as meetings for fathers, volunteer activities, and children's groups and parent-child activities implemented by childcare organizations. Furthermore, we developed an index to determine the efficacy of a dialogue-based approach.

研究分野：生活科学

キーワード：保育・子育て 対話型アプローチ 男性の育児参加

1. 研究開始当初の背景

これまで子育て期の親の態度や役割、各種子育て支援プログラムに関する研究は、母親(女性)に関するものが中心で、父親(男性)を対象とした研究、特に父親男性の育児参加を促進し“育児力”を向上させるための具体的なプログラムおよびその効果検証に関する実証的報告は少なかった。もとより父親の場合、父親同士の地域内での繋がりが希薄であることが多く、保育園や母親教室などで顔を合わせ会話することが多い母親同士と比べて、子育てに関する情報交換や、そして子育てに関するロールモデルが得られにくいといった課題があった。そこで、父親にとっても参加しやすく、交流がしやすい対話法が期待されていた現状があった。

一方で近年、企業や大学、職場などさまざまな集団で、ワールドカフェや、オープンスペース、アプリシエイティブ・インクワイリーといった対話手法が注目されていた。これらは元々、企業などの組織変革のアプローチとして発展してきたものであるが、いずれも全員参加の話し合いを尊重するものであり、当事者意識を引き出し、現状や課題の共通認識を図ることができるという特徴があるとともに、個人の意識変化も期待できるという特徴があった。

2. 研究の目的

そこで筆者らは、ホールシステムアプローチを基にした集団的対話法と、心理教育リーダーシッププログラムを基にした参加型アクティビティを軸に、育児参加のモチベーションを高め、父親(または将来父親になることが期待される若年男性)の“育児力”の向上を目指した支援プログラムの開発を行うこととした。さらに前橋市内を研究フィールドとして、市が主催する保護者向けの集まりやボランティア活動などさまざまな機会を利用し、開発したプログラムの実践及びプログラムの最適化を図るとともに、実証的な効果検証を行うこととした。

3. 研究の方法

男性の“育児力”の向上を目指した支援プログラムの開発については、前橋市内のさまざまな会合や催事をフィールドとして、実際に活動を進めながら、プログラムの開発と内容の吟味を行うこととした。

対話アプローチにおける評価指標の開発については、対話法の一つであるワールドカフェの参加者を対象とした質問紙調査を行ない、カフェ後の自己評価の参加者属性別の検討と、自己評価項目の構成概念を実証的に検討することとした。

4. 研究成果

1) 男性の育児参加啓発促進の実践

本研究では、対話を中心とするアプローチをベースとして、子育てに関わる男性同士の対話を進めることにより個々の家族、父親が抱えている課題やニーズを把握することを目的とした。2014年度までの活動では、子育て期の父親や子育てに関心のある男性の集いの場を作り、そこが彼らの居場所、拠り所として機能し絆が作られるよう、参加者全員でのディスカッションやワークショップ、子どもと一緒に遊びを組み合わせたプログラムを実践してきた。

2014年度には前橋市内を研究フィールドに設定して父親の参加を募り、地域の集いの場として「パパトーク」を立ち上げた。主に研究代表者：天宮が主宰するボランティア組織「ぴたごらきっず」を中心に、隔月1回程度の日程で「パパトーク」を実施した。プログラム内容は、ワールドカフェなどホールシステムアプローチを基にした集団的対話法(対話アプローチ)と、参加型アクティビティによって構成される。対話アプローチと参加型アクティビティを組み合わせ、参加者同士の相互作用を引き出すことによって、父親の育児参加のモチベーションを高めることが特徴である。従来のいわゆる父親講座と異なる点は、参加型活動の前に、会話(対話)の時間を十分に確保し、個人の振り返りと洞察とをさまざまな角度から促していることである。対話アプローチを活動の中心とすることで、父親や子育てに関心のある男性同士の結びつきを強め、個々の参加者のニーズや課題点をメンバー全員で確認できることが分かった。特に、父親をはじめ男性に限定したプログラムよりも、家族とともに時間を共有して楽しめるプログラムを求めていることが明らかとなった。

2015年度には前年度の実践成果を基に、父親の抱える課題やニーズをふまえ、プログラムのテーマ設定や構成、進め方など再調整をした。「パパトーク」メンバーの父親をスタッフに加え、親子で参加できるイベント『まえばし親子フェスティバル』を企画、開催した。父親が主体となって親子で楽しめるイベントを企画、立案、実施する一連の活動プロセスを通して、父親の子育て参加に対する意識の向上と、子育てに関わる男性相互の支援的人間関係の形成を意図したものであった。イベントはボランティア組織「ぴたごらきっず」と、前橋市生活課男女共同参画センターと共催で行ない、明和学園短期大学の教職員、学生、県内の高校生など150人がスタッフに加わった。一般参加者数は約1000人にのぼった。

2016年度は必要に応じて新たなプログラムを導入するなど、プログラムの最適化を図った。同時に、プログラムを再調整しながら、

引き続き実践と効果検討を行った。継続参加している参加者については、継続の効果についても検証した。参加者の感想は好評であるとともに、父親たちの活躍する姿を見てそのパワーに驚いたという学生スタッフの感想も得られ、父親の子育てに対する受け止め方にも変容が伺われた。「パパトーク」メンバーは活動開始以降、支援を受ける立場として子育てに関する議論を重ねてきたが、これまでのプロジェクト体験を通して他の家庭への支援をする立場を経験した。その経験は今後自らの子育ての振り返り、育児力の向上にも繋がるとともに、他の家庭との連携にも反映されるであろうことが示唆された。

2017年度には、新たな試みとして「子ども元小マイスター」を立ち上げた。地域の青少年の自主的な活動組織である「子ども会」とその活動を支える「育成会」に焦点を当て、地域コミュニティの再生、延いては子育て家庭の孤立化対策や新しい支援の在り方といった問題へのアプローチとして役立てる。

以下、2016～2017年度の活動について報告する。

《目的》

筆者らは対話を中心とする父親のサポートプログラムを実践し、父親自らが子育てを顧みるとともに、今後の子育てに関心のある男性を中心に子育てについて考えるプロジェクト組織「パパトーク」を立ち上げた。さらに「パパトーク」メンバーをスタッフに加え、親子で参加できるイベントを計画、開催し子育て支援の対象であった父親自らが、他の子育て家庭の支援を行った。

以上のような営みを経て、本研究では、対話を中心とする父親サポートプログラムを継続して行うとともに、様々な立場の父親をシンポジウム形式での討論やパネルディスカッションを行い、男性の育児参加をめぐるニーズや課題を父親の視点から追及する。

さらに地域の父親自らが自発的に親子で楽しめるイベントを開催することを通して、子育てに対する意識の向上と父親相互の子育て支援について考えられるような支援の在り方を考察する。

《方法》

2015年度に引き続き「パパトーク」のメンバーがスタッフとなり活動した。本活動の特色の1つは、スタッフの居住地（前橋市大友町）の子どもたちにむけての活動を中心としたイベントを取り入れたことである。地域の父親の子育てに対する意識と子育て参加の実態を対話および交流会を通して、父親に対する子育て支援の有効性を検討し、それぞれの地域の実情にあった支援の在り方を考察した。

パネルディスカッション・親子向けイベント・科学実験工作、「子ども元小マイスター、紙コップタワーを作ろう」では、生活に身近なものを使って簡単にかつ壮大にできる内容を体験してもらう。これは、空間的

造形体験活動が科学的な見方や考え方の基礎を養うことにも繋がる。紙コップを使って、バランスと規則性を発見しながら、立体造形と空間意識を深めることを体験した。友達と協力して、より高く積み上げ始めたり、繋げたりという共同作業となった。また、参加者同士の言語表現による交流活動が活発に行われた。「子ども元小マイスター、校内オリエンテーリング」では、オリエンテーリング世界大会日本代表の先生を招いて、体を動かす活動を取り入れた。オリエンテーリングの難しさとその楽しさを知り、親子ともども興奮している様子が伺えた。専門性をもった指導者による意図的、計画的な環境が作り出されることにより、参加者が主体性をもって活動できた。「創るコミュニケーション～ごみ袋シェルター創り～」では、45ℓのごみ袋に空気を入れ、それを30袋作り、全て繋げてシェルターを創る。この活動では同じ目的に向け、共同作業を行う中での確に気持ちや意思、また指示を伝えるためにコミュニケーションを図る必要があり、そこに新たな人間関係が生まれた。さらにアートとしての感性豊かな体験となった。「ハロウィンの衣装制作・仮装行列」では、父親が子どもたちと一緒に衣装を制作した。ものを作る過程での学びは技術だけでなく人間関係も深まり、そこに信頼関係が生まれた。3年連続の恒例行事となった仮装行列は、10件の家庭を訪問して「トリックオアトリート」と元気な声でお菓子をもらって楽しんだ。訪問先は、参加者の家やその祖父母の家が中心であったが、2016年度より「ぜひ訪問してほしい」という声があり、新たな訪問先が増えた。これまで実施時間は夕方5時開始であったが、安全面から、2017年度は午後1時から開始とし、歩行の際の安全を確保した。訪問した家々ではお菓子を配る側の楽しさや喜びも表情から強く感じられた。自発的に取り組む父親たちは、自分たちが子どもたちのために企画するという意識を持って臨んでいたが、活動そのものを楽しんでいる様子が見受けられた。「公園壁画制作」では前橋市大友町子ども育成会のもと公園の壁画制作という芸術的な体験活動となった。壁画のデザインはパパトークメンバーの父親が提案をした。大人も子どももペンキと刷毛を両手に壁いっぱい絵を描いた。この先も残り続ける壁画を子どもたちが誇らしげに見ている姿は感動的であり、感性を高める活動であったといえる。最後には壮大な壁画が完成した。「クリスマス会」では、パパトークメンバーが食育ワークショップとしてケーキ作りのイベントを行った。予想を超え、父親たちが料理に興味関心が強く、また完成度の高いものを作り上げた。また、食を通して親子の会話が弾み、特に子どもの作業する姿や過程に対して父親の気づきが多く、言葉に表れていた。

以上、地域での活動について述べてきた。次に対象を群馬県内在住に広げた、のバ

ネルディスカッションについて特筆する。
＜パネルディスカッションの詳細報告＞
2016 年度第 1 回の活動として、これまでの「パパトーク」のスタッフである父親がパネラーとなり、「父親の育児」をテーマにパネルディスカッションを行った。従来通り、コーヒー等の飲み物を準備し、自由な雰囲気の中で遠慮することなく意見や感想を言える雰囲気とした。以下その詳細報告をする。

【実施概要】

第 1 部として「父親の育児」をテーマにパネルディスカッションを行った。パネリストには「パパトーク」メンバーから行政・教育・イクメン・介護育児両立経験者という様々な立場の父親を選出した。参加者は主に群馬県内在住の父親および育児に感心のある男性を対象とし、男性の育児参加をめぐるニーズや課題を追求する。

第 1 部終了後の第 2 部では親子向けイベントを開催し、家族間及び父親同士の交流を図った。この際の講師も「パパトーク」メンバーの父親である。イベント内容は科学実験としてオリジナル缶バッジ制作・スライム作り・コロコロボール作りであった。また、制作時のボランティアスタッフとして、明和学園短期大学の学生 6 名に協力を得た。学生スタッフ以外にも、かつて学生スタッフをして参加していた卒業生が幼稚園教諭、保育士、施設職員として活躍するなか卒業後もスタッフとして参加した。

会場は前橋市内の「前橋プラザ元気 21」とした。主催はボランティア団体「ぴたごらきっず」である。参加者数は 46 名であった。

【結果】

様々な立場の父親のディスカッションは参加者に強く興味を持たせるとともに、自由に育児観を表出し意見交換をすることが出来た。また、育児に関する情報提供を様々な観点から行うことができた。さらに「父親の育児」というテーマで話し合いを進めるうちに、自然発生的に「妻から求められること」へと変わっていった。そこでは家事に対する量的要求及び質的要求に悩む姿が見られた。

これらの活動では子育て支援を受ける立場であったパネリストが企画運営し、支援する立場になることによって、さらに父親間の結びつき、連帯感を強めることにつながった。また、テーマに関する知識を深め共通認識を得るとともに、自己の育児観の表出、参加者の相互理解につながった。

親子向けイベントでは家族間の交流を深め、家族との連帯感を感じることで、これまで以上に父親が率先して動く姿が見られた。そこでは家族間の交流を深めるとともに、他の家族との連帯感を感じながらも父親同士が意識し合っている様子が確認された。対話を中心とする父親サポートプログラムの実践については、順調に活動を進めることができ、一定の成果が得られた。継続的に活動を進めたことで、父親や子育てに関心のある男

性が主役となったプロジェクトの実践が可能となり、支援を受けるだけでなく他を支援する立場へと進展する可能性も示唆された。パパトークメンバーは本活動の開始以降、ともに子育てについて討論を重ね子育て支援を受けてきたが、現在は他の子育て家庭への子育て支援をする立場になった。

2) 対話アプローチにおける評価指標の開発

対話アプローチの手法のうちワールドカフェ（以下、カフェ）は実践例が多く、最近では実証的な検証報告もみられる（eg., 山下ら, 2014; 浅田ら, 2012; 根本ら, 2012; 前田ら, 2012）が、その数はまだ十分とはいえない。また、カフェの効果を検証するための指標についても、一般的な指標は見当たらず、研究相互の比較が難しいのが現状である。カフェの趣旨や対象者によってカフェの成果の評価は当然異なるであろうが、趣旨や対象者によらず、一般的なカフェの効果を幅広く捉えることのできる簡易な指標の開発が期待されることである。そこで本研究では、カフェの効果を検証するための基礎的な知見を得ることを目的として、カフェを実施した後の感想を調査することとした。

《方法》 対象：子ども会育成関係者を対象とした研修会（会合 1 と 2）および、A 県教育事務所が主催した地域家庭教育セミナー（会合 3 と 4）参加者のうち、有効回答を得た計 412 名。

指標：カフェ後の感想に関する項目。「自分の考えや意見を見つめ直すことができた」、「自分が経験していない出来事や状況を知ることができた」、「自分の話を多くの人に聞いてもらえた」など 20 項目について、「そう思う」であれば 5、「そう思わない」は 1 とし、5 件法で記入を求めた。

《手続き》4 つの会合いずれにおいても、2～3 時間程度のワールドカフェ形式の対話を行なった。会合 1 では参加者が 4 つの会場に分かれ、それぞれ異なるカフェテーマを設けた。カフェテーマは「子ども会『5 分間 K Y T』をどう広めるか」、「子ども会安全共済会加入者増にどう取り組むか」、「連合組織としての都道府県・市町村（地区を含む）の連合育成会と単位育成会のパイプをどう太くするのか」、「子ども会活動とは何か・・・原点に戻ろう」の 4 つであった。4 会場それぞれにカフェホスト（司会者）を配置した。

会合 2 のカフェテーマは、「地域の力、家庭の力、学校の力、そして『子ども（会）のチカラ』について考える」、会合 3 では「『家庭教育を考える』老いも若きも、家庭・地域・学校も、それぞれの立場でコミュニケーションを考えよう」、会合 4 では「地域の力、家庭の力、学校の力、そして、『まなぶチカラ』について考える」であった。カフェ終了後に質問票を配布してその場で記入を求め回収した。

《結果》

(1)カフェ後の感想項目の平均値の比較

4つの会合のデータを合わせて、項目ごとの評価平均値を求めた。男女別に比較した結果、平均値差が認められる項目は「ふだんよりも他人の話を聞くことができた」、「落ち着いた雰囲気の中で話をすることができた」、「居心地のよい時間を過ごすことができた」の3項目であり、いずれも男性よりも女性の平均値が高いことが示された。

次に、年齢階級別に比較した結果では、「ふだんよりも他人の話を聞くことができた」、「人はいろいろな考え方を持っていることを実感できた」、「会話を通して他人と共感することができた」、「自分が経験していない出来事や状況を知ることができた」であった。いずれも60歳以上に比較して45歳以下の平均値が高いことが示された。

(2)カフェ後の感想項目の因子分析

項目の分類を目的に、再尤法、プロマックス回転による探索的因子分析を行なった。比較的分かりやすい結果が得られたのは5因子モデルであった。

因子1は「自分の考えや意見を見つめ直すことができた」、「自分自身について見つめ直すことができた」、「ふだんは話せない自分の考えや意見を話すことができた」など、自身の振り返りに関する項目によって構成されており、「自身の振り返り」を表す因子であると考えられた。

因子2は「自分が経験していない出来事や状況を知ることができた」、「人はいろいろな考え方を持っていることを実感できた」、「自分の気付かなかった考え方を知ることができた」など、多様な意見やアイデアの共有に関する項目によって構成されており、「他者との話題の共有」を表す因子であると考えられた。

因子3は「自分の話を多くの人に聞いてもらえた」、「いろいろな人と話をすることができた」といった項目で構成されており、「豊富な会話」を表す因子であると考えられた。因子4は「もっと時間をかけて大勢の人と話をしたいと思った」と「もっと時間をかけて特定の人と話をしたいと思った」の2項目であり、「会話時間の不足」を表す因子であると考えられた。

因子5は「落ち着いた雰囲気のなかで話をすることができた」、「居心地のよい時間を過ごすことができた」といった項目で構成されており、「自由でオープンな雰囲気」を表す因子であると考えられた。

なお、因子間相関は比較的高いことが示された。

(3)因子を構成する項目合計点の平均値の比較

因子分析による項目の分類をふまえ、各因子を構成する項目の単純合計を求め、男女別に比較した結果、平均値差が認められたのは因子1（自由でオープンな雰囲気）であり、

男性に比べて女性の平均値が高いことが示された。

年齢階級別に比較した結果では、平均値差が認められたのは因子2（他者との話題の共有）であり、45歳以下群の平均値が高いことが示された。最後に、調査対象会合別に比較した結果では、会合別による平均値差が認められたのは因子1と因子2であり、いずれも会合4において他のいずれかの会合より平均値が高いことが示された。

《考察》

(1)カフェ後の感想項目の平均値比較

本研究ではカフェ後の感想について20項目の評価を求めた。その結果、項目ごとの平均値はおよそ3.8~4.6の範囲にあり（表2、表3）カフェの体験が全体として肯定的に評価されていると考えることができるだろう。項目ごとにみると、女性は「ふだんよりも他人の話を聞くことができた」、「落ち着いた雰囲気の中で話をすることができた」、「居心地のよい時間を過ごすことができた」において男性より平均値が高く、「自由でオープンな雰囲気のもとで多くの人と会話を行なう」というカフェの特徴を高く評価していることが伺える。年齢階級別では、45歳以下群において、「ふだんよりも他人の話を聞くことができた」、「人はいろいろな考え方を持っていることを実感できた」の平均値が高いことが示され、同様にカフェの特徴の1つである「他者との多様な考えやアイデアを共有できる」点を高く評価していることが伺われた。本研究の対象はいずれも子どもの教育や子育てに携わる人々であることを考えると、女性や子育て世代である年齢層を含めて、参加者全員にとってカフェが参加しやすく、満足のいく会合になっていることが求められる。自由でオープンな会話ができる雰囲気づくりや、他者との考えやアイデアの積極的な交流は、カフェを効果的に行なう上でのポイントとして、今後も重視していく必要があるであろう。

(2)因子分析結果と項目の分類

本研究では探索的に「自身の振り返り」、「他者との話題の共有」、「豊富な会話」、「会話時間の不足」および「自由でオープンな雰囲気」の5因子に分類する結果を採用した。このうち「自身の振り返り」と「他者との話題の共有」については、職場での研修会や授業での演習など、カフェを学習機会として活用する上においても、重要な評価の観点であると思われる。

例えば授業でカフェを活用する例として、保育者養成における実習事後指導が挙げられる（利根川ら、2011；音山ら、2012；音山ら、2015）。そこでは、他の実習生との対話を通して、自分の実習園以外での出来事や体験も含めて幅広い知識を得て、それをもとに自分の体験を客観的に捉え直していくことが求められ、本研究で得た「自身の振り返り」や「他者との話題の共有」の分類はこれに相当

する。これまで対話の効果の評価指標としてしばしば保育者省察尺度（杉村ら，2007，2009）が使われてきたが、これは保育体験の内容別の省察となっており、カフェ自体の効果把握するものではなく、また当然ながら保育にテーマが限定されている。そこで、保育以外の学習機会も含めて、幅広くカフェの効果の評価できる一般的な指標が期待されているところであった。今後は、「自身の振り返り」と「他者との話題の共有」の項目を軸として、データを追加し、評価指標としての信頼性や妥当性を検証していくことが期待される。

また「豊富な会話」、「会話時間の不足」、「自由でオープンな雰囲気」は、カフェの進行を工夫する上での手がかりとなる要因であるとも考えられる。これらの項目は、“自由でオープンな雰囲気のもと多くの人とじっくりと会話する”というカフェの特徴が十分に機能しているかをチェックする目的、すなわちカフェホストや主催者側の反省材料としての活用も考えられるであろう。

(3) 因子を構成する項目合計点の平均値の比較

因子分析による項目の分類をもとに、項目合計点の比較を行なった。その結果、「自由でオープンな雰囲気」では女性の得点が高く、「他者との話題の共有」では45歳以下の得点が高かった。項目ごとの比較でも述べたように、参加者全員が気軽に参加できることを促すということを考えると、これら結果は女性や、子育て世代である年齢層のニーズであると考え、今後も重視していく必要があるであろう。

最後に、調査対象会合別の比較を行なった。その結果、「自身の振り返り」と「豊富な会話」で、4つの会合の中で差がみられた。いずれも会合4の評価が高いことから、テーブルホストを事前に決めたことが影響しているのかも知れないものの、比較実験を行なっているわけではなく、この点については確かなことは言えない。また、会合4の年齢階級の割合が比較的バランスの取れた構成である点が影響しているかも知れないが、これも仮説に過ぎず、結論として本研究で扱ったデータだけでは説明が困難であるというほかない。ただし、会合によりテーマや対象者などが異なる以上、差が生じることは当然予想されることであり、ある意味で自然な結果とも言えるだろう。今回は一般的な指標の開発を念頭に置いたものであるため詳細は他に譲るが、会合のテーマや対象別の差についても、今後データを蓄積した上で検討する必要があると言える。

いずれにしても、今回、カフェ後の感想が5つの要因に整理できたことで、カフェ後の感想が捉え易くなったと言えるだろう。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計5件)

天宮 陽子・塩澤 恵美・音山 若穂, 「パパたちによる子育てトーク」を中心とした男性育児参加啓発促進の試み: 実践報告. 明和学園短期大学紀要, 第24集, 1-8, 2014.

音山 若穂・天宮 陽子・塩澤 恵美, 対話アプローチにおける評価指標の開発 - ワールドカフェの事後評価の分析 -, 明和学園短期大学紀要, 第25集, 61-70, 2015.

天宮 陽子・塩澤 恵美・音山 若穂, 「パパたちによる子育てトーク」を中心とした男性育児参加啓発促進の試み: 実践報告(第2報). 明和学園短期大学紀要, 査読無, (25), 71-81, 2015.

天宮 陽子・塩澤 恵美・音山 若穂, 「パパたちによる子育てトーク」を中心とした男性育児参加啓発促進の試み: 実践報告(第3報). 明和学園短期大学紀要, 査読無, 第26集, 23-31, 2016

天宮 陽子・音山 若穂, 「パパたちによる子育てトーク」を中心とした男性育児参加啓発促進の試み: 実践報告(第4報). 明和学園短期大学紀要, 査読有, 第27集, 35-41, 2017

〔学会発表〕(計2件)

天宮陽子, 「父親の育児参加を促進する参加型教育プログラムの一実践」日本公衆衛生学会, 2016

天宮陽子, 「父親の育児参加を促進する参加型教育プログラムの一実践 第2報」日本公衆衛生学会, 2017

〔その他〕

<https://www.hirakatagakuen.ac.jp>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

天宮 陽子 (AMAMIYA, Yoko)
明和学園短期大学・生活学科・准教授
研究者番号: 10645964

(2) 研究分担者

音山 若穂
群馬大学・大学院教育学研究科・教授
研究者番号: 40331300

(4) 研究協力者 (2014~2016)

塩澤 恵美
群馬パース大学福祉専門学校・講師